

(2) 周辺環境の保全の確認

空間ガンマ線量率等のレベル並びに放射性核種の濃度及び分布について調査した結果、女川原子力発電所の影響は認められなかった。

ア 電離箱検出器による空間ガンマ線量率

表－２－１に、モニタリングステーションにおける電離箱検出器による空間ガンマ線量率の測定結果を示す。福島第一原発事故前から測定している局においては、同事故前の測定値の範囲内であった。

イ 放射性物質の降下量

表－２－２及び表－２－３に、降下物中の対象核種のうち、Mn（マンガン）－54、Co（コバルト）－58、Fe（鉄）－59、Co-60、Cs-134、Cs-137について分析した結果を示す。なお、本期間における欠測はなかった。

分析の結果、Cs-137が検出されたが、これまでの推移や他の対象核種が検出されていないこと、女川原子力発電所の運転状況等から、福島第一原発事故の影響によるものと考えられる。

図－２－１８に昭和６１年度以降のCs-137に係る月間降下量、図－２－１９に同事故後のCs-137に係る四半期間降下量、図－２－２０に同事故後のCs-137に係る月間降下量及び図－２－２１に同事故後のCs-134に係る月間降下量について、それぞれの推移を示す。

ウ 環境試料の放射性核種濃度

人工放射性核種の分布状況や推移等を把握するため、降下物以外の種々の環境試料についても核種分析を実施した。なお、対照海域のエゾノネジモク１試料について、波が高い日が続いたため採取できず、欠測となった。

表－２－４に迅速法による海水及びエゾノネジモクのI（ヨウ素）-131の分析結果を示す。I-131は検出されなかった。

表－２－５に環境試料の核種分析結果の概要を示す。また、図－２－２２から図－２－３２には、福島第一原発事故後の各種環境試料中における人工放射性核種濃度の推移を示す。

対象核種については、陸土、松葉、アイナメ、マボヤ及び海底土の試料からCs-137が検出された。これらのうち松葉、アイナメ及びマボヤについては同事故前における測定値の範囲内であった。陸土及び海底土については、同事故前

~~るの測定値の範囲を超過していたが、。ただし、同事故による影響が少なくな~~
~~ったによる高い測定値を除外した、平成28年度以降におけるの測定値の範囲内~~
~~であり、~~った。なお、本項目では同事故の影響で高い測定値が確認された平成2
3年度から平成27年度までを除外し、平成28年度以降の測定値と比較してい
る。以上を踏まえ、これまでの推移や他の対象核種が検出されていないこと、女
川原子力発電所の運転状況等から、同事故の影響によるものと考えられる。

また、Sr-90については松葉及びワカメの試料から検出されたが、ワカメにつ
いては同事故前における測定値の範囲内であり、これまでの推移から同事故と過
去の核実験の影響によるものと考えられる。松葉については、同事故前における
測定値の範囲を下回った。

これら以外の対象核種については、いずれの試料からも検出されなかった。